



Sigma

Fate Zero
Gilgamesh X Lancer White

R18
Adult

成人向
同人誌



砂漠の花

x *Sokenastii*



けろく座

快樂の

x *Qi*

広い、あまりに広大でこの世界に足を踏み入れた時、体がすくんだ。心は決めていた、覚悟もあったがあてどない旅に出る心許なきで一步を出すに勇気がいった。

だが――

一刻の猶予もないのが本当だ。

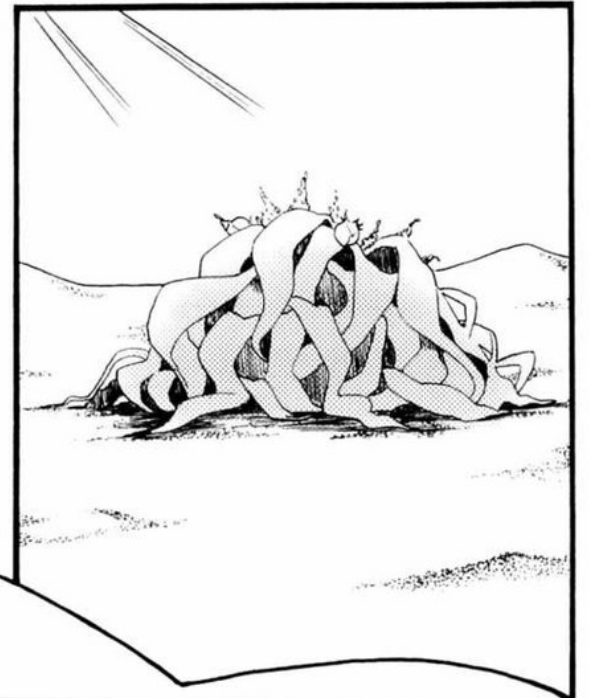
フィジカ
ワリオアーサ

——興味深い体

x *Kirieya*

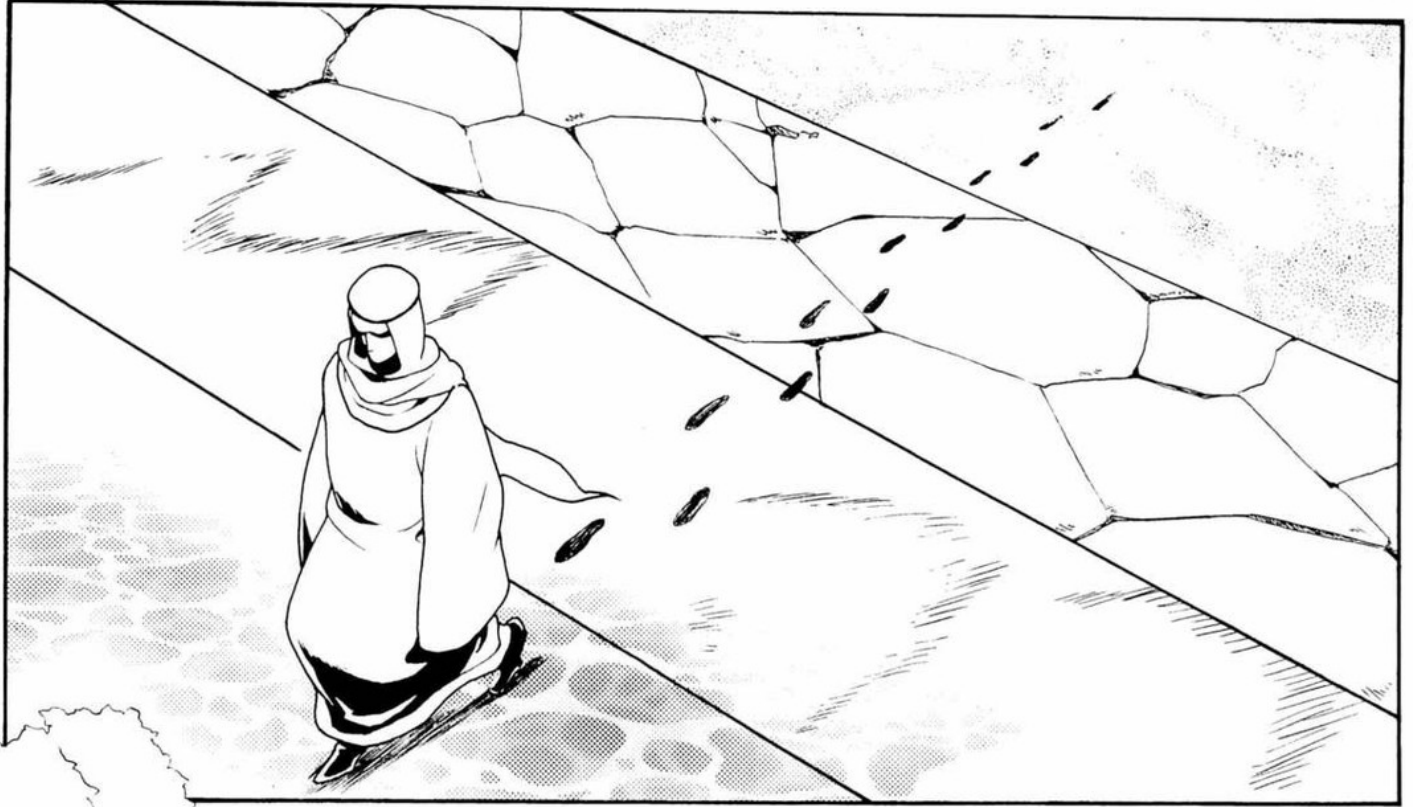


砂漠の花 そこなし



あれは……

〇〇



ようこそ
『楽園』へ！

ここは
楽園さ！

働かなくても
食い物がある！
酒もだ！



住人達は
口を揃えて
「ここは楽園だ」
と言う。

日がない一日
好きな事をし
腹が減れば食へ
眠くなれば寝る。

必要な物はどこぞ
からか供給され
無くなる事はない。
楽園といえは楽園だ。

しかし虚ろな
顔だな…

ん、

！

！
待て！



ここは
楽園と聞く

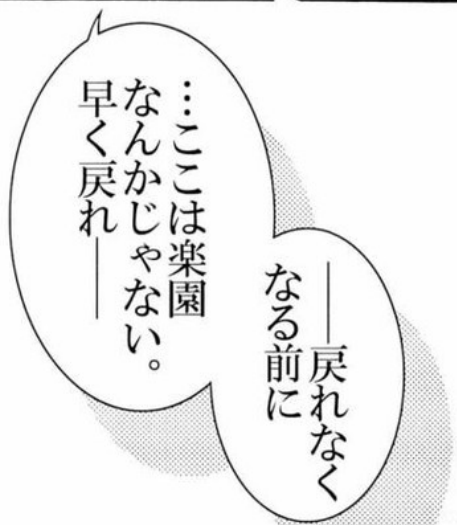
確かにどいつも
浮かれた顔を
しているな

だが妙だ、
貴様だけ
辛気くさい
顔をしている

まるで全てに
見離された様な、
何もかも失って
しまった様な…

それは何故だ？

—そう、諦念だ



…ここは楽園
なんかじゃない。
早く戻れ—

—戻れなく
なる前に

—そうだ、ここは楽園などではない。



…貴様は
思い違いを
しているな

付きまとう
だど？

—俺は
戻れと言った
はずだが…

それに何故
付きまとう？

我は我に
愛でられるべきものを
愛でているにすぎん

それに――

貴様とて
満更でもないという
顔をしている
ではないか

我に
愛でられながら
不遜な奴め

そんな
馬鹿な……

そんなはずがない！
この男は旅人だ、
俺とは違う
いずれここを
出て行ってしまっ

俺はこいつとの
やり取りを
いつの間にか
楽しんでたのか

そうならば、別れを

別れを、告げなければ



どうした

何故そのような
顔をする？
我が膝元で
何を苦しむ

—戻るんだ…

何？

もっと早くに
言うべきだった
ここは樂園など
ではない

牢獄だ

誰もここからは
出られない。
樂園の夢に囚われ
やがて何もかもを
忘れてしまう



旅人が来る度に
ここにいては
いけないと
言い聞かせてきた

しかし毎回無駄に
終わり、旅人達は
この住人になっ
てしまう…

…そのうち、
俺は諦めて
しまったんだ

—帰れなくなるんだ
…ここで死んだように
生き続けるしかない

自分が何者
なのかも忘れ
どこにも行けない

こんな気持ちに
ならずには
すんだのに……!

……

早く言っておけば良かった、
そうすればこんな

——帰れと忠告する事が、こんなに辛くなるなんて——

……一つ訊こう

お前は
何者だ？

——そうか

分からない、
分からないんだ！
俺にはもう自分が
何者なのか、

名前すら、
思い出せ
ないんだ……!

だからお前も、

こうなる前
はやっ

ンッ

ふ

ち
せ

—今の殺し文句は
中々に強烈だったぞ

なっ、何を！

何だ自覚が
ないのか？

—良からう
ならば身体で説いて
聞かせるとしよう

…お前はまるで
愛でられるのを待つ
日陰に咲いた花の
ようだな

酷く甘い

ん
ん

れっ

ん

！



我が名は
ギルガメッシュ

はく、

あ、

他の何を
忘れても

我が真名だけは
魂に刻んでおけよ

は、

は、

ニ

ぬるッ

ギル、
ギルガメッシュ…
痣が…

どこか怪我でも
したのか？

— ああ、
これは刺青だ

透かし彫りと
違ってな

血の巡りが
良くなると
こうして文様が
浮かび上がる

唯一の
王たる証よ

王の証…

そうだ

お前にも
見せてやろう、
我が国を

無理だ…

俺はもう
どこにも行けない、
ここからは
出られないんだ！

無理なものか

約束しよう

お前に世界を
見せてやる

ああ

叶うはずもない約束よりも、ギルガメッシュ、

それを信じて
みたいと思わせる、

お前の方が
残酷だ



戻ったか

不死の薬なんて物は
知らんがこの先の
砂漠には人を迷わす
花があるそうだ

ただし、
その花に囚われて
生きて帰って来
者はいない



何でもその花に
誘われた者は
永遠の楽園を
見られるんだそうだ

——当ては外れたが
中々に愉しめたな

!

——ここにいたか

約束だ、

我がお前に
世界を見せて
やろう

終



ギルガメッシュ様っ……

遅い。

…申し訳
ありません…

けぞく座

快樂の

おい



しっしっかし…



我に意見か？

どうか...
これ以上は...

いえ...

ザクザク

続きは
人気のない所で...♡

...とここまでが
おおよその想定



ギルガメッシュ様

クワッ

そして現実

カチカチ



貴様…
随分と
余裕そうだな…



…ああ、
そういうえば現代の
大人のオモチャなるものを
臂に入れておりましたね。



おっかーい
おりました

あっ
動いた!!

興を解せぬ
不粋者が!!

fig.



カチカチ



……
すみませんでした。

……もしかして
私は
不感症^{マダグ}というヤツ
なのでしょうか？

ああ？

不特定の「誰か」に
見られるという
スリルや背徳感やらに
興奮を覚えるのが
通常なのでしょうが……
分からないのです。

赤の他人の
視線に
何の感慨も
ない。

私に
向けられる
侮辱も賞賛も
等しく
無価値です。

それが我が君に
及ばぬのなら……



これが合図

主の指に
許可された
膚だけを曝け出す



ん。
あ。
あの…
どうか…
ご奉仕のお許しを…



…貴方への
奉仕は別で



…ありがとうございます…
ごめいませ…



その口で
不感症とは
良くも言ったものだ…



…殊勝だな。

アッ
あッ!?

おや、不感症じゃ
なかったのか?

は

ダメ…です、
さっきの、何とも
なかったのに…

気持ちいッ
い………!!



随分と
お気に入り
の様だが

挿入するには
邪魔だ…

あッ…



…と

中で滑って
出ないな。

はあッ

あッ

あッ

あたッ…てるッ
う…ふああッ!!

はあッ…



大して慣らしもせずによくも啜え込むものだな...

はっ...

アッ



はっ...

はいッ...

もちろんっ...
ギルガメッシュ様
でしたら...

あッ

あッ

は

いかなる時でも
お好きにお使用い
ただけます...

アッ
アッ
アッ



騎士たる者が...
嘆かわしい程
品のない姿だ...

はッ...

はッ...

しかし
その分^{そそ}喰^くる

あ…あ…!!

あ…

あはッ

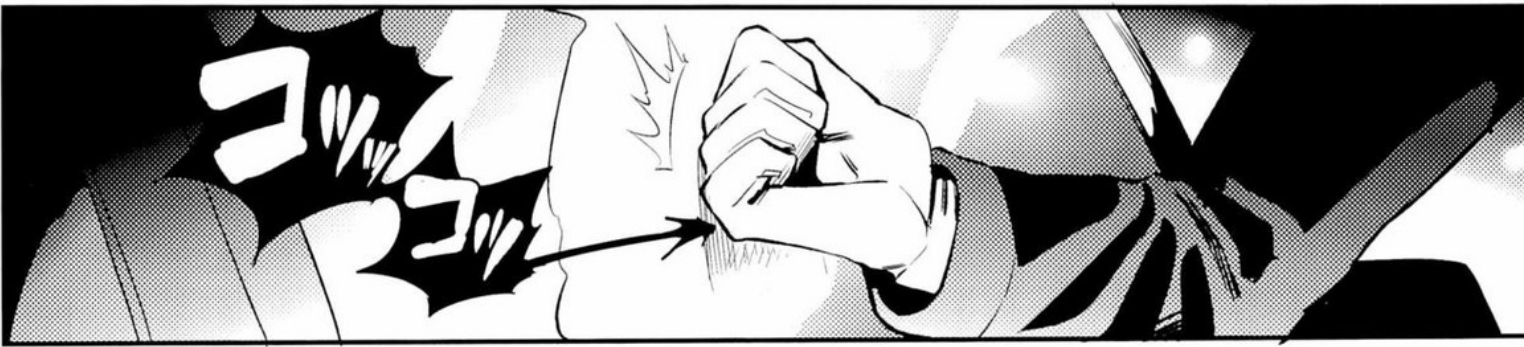
ああ…すご
だめえッ…
ダメっ…ですっ…

雌^{メス}のよう^{オシ}に
濡^ぬらしおっ…

はッ

注^ついでやるッ…
溢^{あふ}すなよ…!!

はッ



…すぐにでも
動けます…



あのねえ、
ココ駐車禁止
なんですけど

左
ハンドル…

…あれ、お連れさん
具合悪いですか？
救急車呼びます？



失礼、
ケイハイ…

いえ…
大丈夫です

フィジカ
ワリオーサ
—興味深い体—



広い、あまりに広大でこの世界に足を踏み入れた時、体がすくんだ。心は決めていた、覚悟もあつたがあてどない旅に出る心許なきで一歩を出すに勇気がいった。

だが——

一刻の猶予もないのが本当だ。

早くに彼を見つげ出さなければ、彼だけでない、自分の身も危うい。ディルムッドは呼吸を一つ、そして広大な宵闇の砂漠へと歩み出した。

幾時経ったかわからない、歩いても歩いても、人影一つ、生き物の影一つ見えないことに絶望を覚え始めるほどは歩いたと思うのだが。広がる砂の山は時折

吹く風で形を変え、風紋を描き出していく。しかし空には月も星もなく、ただ濃紺の麻糸で織り上げたような、宵闇が広がるだけだ。ここに生き物の息吹がないことに、ディルムッドは心が痛む。

無限に続くかと思われる砂漠の荒野、方角もわからなくなり、呆然として足を止めた。そのとき、不意に視界の隅に黒い影が浮かび、とくん、と心臓が高鳴る。

「……………」

じつと、目を眇めて砂山の先にある影を見つめた。淡い闇の中、形作られているのは崩れた建造物、廃墟の町のような。荒涼とした風景の中、ようやく浮かび上がった物の影にディルムッドの身も軽くなった。廃墟とはいえ町だ、人が生活した痕跡であり、それは彼の生きた後先でもある。そこに彼の姿がなかったにしても、手がかりとしての何かは残されているのではないか。

ディルムッドは淡い期待を抱き、足早に廃墟へと向かった。さくさくと踏む砂の音も聞きなれて、ただ足を取られるのが鬱陶しい。少しずつ近づくとつれ廃墟の様相がはつきりとディルムッドの目に映ってきた。

ジグラット……

砂漠の丘、突如として現れた廃墟郡は、乾いた煉瓦造りの町並み。それはまさしく王が王であった町、ウルク。

ウルクはジグラットと呼ばれる高層の煉瓦とアスファルトで造られた神殿を中心に成り立っている。廃墟の最も高みに、いまだ神々しい威光を保った神殿がどっしりとある。七層のそれは、上から金、銀、橙、蒼、赤、黒、白に塗り分けられていたという。

ディルムッドは静かな廃墟に足を踏み入れ、石畳の回廊を町の中へと進む。神殿はすでに上半分が崩壊してなく、色も宵闇の中では見分けがつかない。

「……………」

人のいない町ほど物悲しいものもない、デイルムッドは静かに辺りを見回しながら神殿へと歩き続ける。白茶けた煉瓦のアーチは今にも崩れ落ちそうで、デイルムッドの動きも慎重になった。

この景色は彼の見ている景色でもある。

——彼は一度不死に失敗している。

友を失い、最も死を恐れ、不死を探求し続け、しかし不死の薬草を蛇に食べられて失敗した。

その心の有り様なのか、この世界はすでに崩れ始めている。大切な不二の友と暮らした黄金の思い出の都市であるはずが、色を失い、褪せ、砂に還ろうとしていた。

もう間に合わないのか：いや、と軽くデイルムッドは首を振り、それでもここで立ち止まることは許されないと心を決めて神殿へ向かう緩やかな坂道をのぼる。

「……………」

淡い光、全てが青い世界、ふと石畳に何かの痕跡があることに気がついた。まるで闇を凝縮したような黒い霧、紙魚が点々と石畳についていた。それはデイルムッドを誘うかの如く、神殿の方角へと続いている。古く、こびりついた血痕に見えなくもない、しかしそれよりももっと黒く、ぞわぞわと蠢いて形を変えている。油断をすればデイルムッドの白い足に纏わりつくようだ。だん、と大地を踏みしめ闇を振り払って、デイルムッドは黒い痕跡を追いかけていった。崩れかけた日干し煉瓦の家並み、風が拭きぬけ埃が舞う。

ようやく廃墟を抜ければ神殿ジグラットの正面に出る、やはり黒い濁った跡は神殿の中へと繋がっていた。デイルムッドは威容を残す神殿を仰ぎ見た、長い悠久の時の流れで崩れたのか、上二層はすでに崩れてなくなっているものの、

ファイジカ・ワリオーサ



それでも神が住まうにふさわしい。気になったのは、例の黒い紙魚がこの神殿にもこびりついていることだった。

『侵食されているのか』

心中で呟き、神殿の中へと足を向けた時、ふわっと淡い光とともに人影が浮かんだ。

「……………！」

神殿の正面に、二人の女神官が立ち両手を広げて祈っている、その傍らには小さな美しい影があった。長く色素の薄い髪がたゆたい、裾の長い白い貫頭衣に黄金の首飾りのあどけない面の人は、女神官の祈りにあわせて神殿に頭を下げている。

——あれがエルキドゥ。

初めて姿を見た、王の真の友。女神官はウルクの神、この神殿の主、月の女神イナンナに仕えたナンナたちの祈禱の様子だろう。だが肝心の王の姿がどこにも見えない。

この幻は王の目線なのか、それとも王はいなかったのか。いずれにしても美しい人影はデイルムッドにその淡いを垣間見せると、そのまま風に流れて消えていった。

「……………」

もし彼がこの幻を追っているとすれば、この近くにいるはずだ。

デイルムッドは、ぎゅ、と両手にした愛槍を握り締め、上へと向かう階段を登り始めた。ジグラットは巨大な煉瓦とアスファルトで出来た建物に螺旋状の階段が取り巻き、上層へと向かっている。これが『バベルの塔』の由来ともなった神殿である。崩れかけた階段に足を取られぬよう注意しつつ、上へ上へと向かう。

デイルムッドの白い足は上へと向かうのしかし、心が重たくなるのはなぜだろう

う。

彼は神に友を奪われ、不死に失敗したことで神を厭う。

もしディルムツドの今の姿を見れば、間違ひなく嫌悪するに違ひない、王の性質からして素直に応対してくれるとは考えにくい。

だが最早後戻りも出来ないのだった。彼に忘れて貰えねば、自らの身も危うくする。

唇を噛み締め、一步を踏み出す、明かりさえない薄闇を泳ぐような心許なさを感じながら。

ふう、と軽く息をつきようやく登りきった階段の先に広がるのは、第五層の大広間だった。金銀に彩られた上層部を失い、天井が抜けてない。半ば壊れたレリーフに飾られた支柱が立ち並ぶ、剥げてくすんだ橙の床がかるうじて本来の様子を伝えている。

ディルムツドが広間に踏み込んだ時だった、不意に黒い影が床に浮かび上がったのだ。まるで闇色の紙魚から滲み出した影のようにディルムツドには見えた。

ずず、ずず、と床から巻き起こる黒い霧が渦状になったかと思うと、中から人影が現れた。

「……………っ！」

名を叫びそうになり、ディルムツドは慌てて理性で堪えた。ぐ、と唇を強く噛む。そして全身が現れた時、ディルムツドは息を呑んだ。

黒い……………。

あの黄金に輝く鎧は、漆黒に変化していた、それもただ黒いだけではない、禍々しい闇の霧に足元は包まれている。彼は頭を深くもたげ、まどわり着いた

闇が重いかのように前屈みに立っていた。何よりディルムツドの目を引いたのがだらり、と下がった右腕である。がっくり右肩が外れて用をなさない、使い物にならない腕をぶら下げているのだ。下がった右手の黒い手甲が、床にあたって擦れてじやり、じやり、と耳障りな音を立てた。振り子のように右手が動き、音が鳴る。すでに痛みも感じないのだろうか。

ごく、とディルムツドは声を飲み込む。俯いた顔は影が落ちて全く見えぬ表情がわからないが、すでに自身の指先が微かに震えていた。

恐ろしい、とディルムツドの体は訴えている。

かつ、と屈んでいた彼の黒い体が伸び上がった。面がディルムツドに向き、斜めから睨みつける、その深紅の目は何も映していない。空っぽで哀しいほど赤い。そして瞳孔が開いたかと思うと、彼の体が真上に飛んだ。左腕一本で剣を持ち、頭上に刃を振りかざし、一直線にディルムツド目掛けて振り下ろされる。

——問答無用か

二槍を前で交差させ、正面から切りかかった刃を受けたが、途端に全身に痛みが走った。強い衝撃が骨を駆け抜け、びりびりと麻痺して握った槍の柄を落とすようになる。受けた力を止めきれず、ずず、と大地に跡を残して後方に下がってしまった。かるうじて刃を止めたものの、痛みで全身が総毛立っている。奥歯を噛み締め、ディルムツドは怯みそうになる自分を叱咤した。

「……………」

ディルムツドの葛藤など露も知らず、また興味も惹かないのか、漆黒の鎧をまとった黄金の王ギルガメッシュは左手に抱えた剣を肩に乗せ、右腕をぶら下げて俯いている。黒い足が踏み出せば、ずる、ずる、と足元の黒い霧もそれにあわせて蠢いた。この世界の黒い王が、ディルムツドの回りを這うように歩く。品を定める風にも見てとれるが、それほど前向きな意欲は感じない。

「……だれの…許しがあつて…ここに…きた、白い…虫」
「……………」

きゅ、とディルムッドは唇を噛む。途切れ途切れに、地の底から湧くような声で問いかけた黒い王に胸が痛んだ。ディルムッドの記憶は少しもないらしい。せめて心の片隅にでも置いて欲しかった。欠片でも残して欲しかった。それが白い虫呼ばわりか。

睨み返してみたが、深紅に輝く瞳には何も映っていない、目の前にいるのは彼にとつて侵入してきた羽虫の如きもの。

「……いらえないとは……愚昧め」

声はがさがさとして聞き取りにくい、雑音に混じった微かな悲鳴のような。

だら、と右腕をだらしなく下げ、ゆったり前に屈む、だが動きが見えたのはそこまでだった。気がつけば、王の見開かれた瞳はディルムッドの鼻先にあつた。

「っ！」

左手一本で剣を平青眼に構え、ひと息に突いてきたのだ、空間を撃砕するような速さでディルムッドは僅か皮一枚避けるのが精一杯だった。咄嗟に左に飛びのいたが、右上腕部の白い革の鎧は鋭い刃で裂けた。追撃を許さぬようディルムッドが右手の槍の穂先を回転させれば、まるで子ども攻めめのように王の剣が容易に弾き飛ばす。

がらん、と互いの刃が鳴って薄い闇の中に火花が散った。

王は再び剣を左の肩に乗せ、頸を上げて虫けらを見やった。黄金の王が浮かべる表情はどこにもない、牙え渡る美貌であるだけに、ただ空虚な無がある様は見る者を寒くさせる。薄い唇が開いた。

「なぜ…ここに、存在するを許されるのか…そうか…貴様…」

眷属か。

ファイジカ・ワリオーサ



言葉が吐かれたと同時に再び漆黒の鎧が飛び上がる、右手が使えないため相手方は黄金の王と違う。更に俊敏で隙がなく、大剣を大きく使い近寄ることすら許さない。跳躍ざま前回転、縦に振りかぶった剣は勢いを増しディルムッド目掛けて落下する。

まともに受けては腕が折れる、ディルムッドが後方に退けば、立っていた場所に剣が突き刺さった。落下の衝撃と黒い瘴気がどどん、と同心円に渦巻いて地響きを起こす。肩から外れた右手が振り子のように大きく揺れ、がしゃんがしゃん、と床にぶつかった。

床に左手で大剣を突き刺し、しゃがむ体勢から、彼の両足が大地を蹴った。ディルムッドを更に壁際に追い詰める如く、怒涛の攻撃が続く。ぎざぎざ、と前屈みの姿勢で飛び出し、左手の大剣を大きく回転させた。左右どちらに逃げて追撃される、防御の方法を持たないディルムッドは二本の槍で弾く以外にない。だがすでに両手は痺れて力が抜けかけている、握り締めているのは戦士としての矜持だけだ。闇の王と化した彼は、力をとどめる必要もない、ありのままの剣技でもつて攻めてくる。その力の強さ、怯まない体にディルムッドはなす術がなかった。

眷属としてこの世界に入ることは出来ても、漆黒の王に招かれた訳ではない、この主は彼である。ディルムッドが敵うはずもないのだ。

しかし諦めて武器を捨てることは許されない、ディルムッドは渾身の力をこめて王の剣を跳ね返し、体勢を立て直した。

「……………刃向かう…つもりか…」

常に俯き加減の、王の長い睫毛の影が濃い。そこから赤い光が鋭く滲み出て、血のようだ。左腕も力なくだらりと下がり、剣先が床の石畳に擦れて青い火が飛んでいる。きりきり、と子ども落書きみたいな半円を描いて。

虚脱した動きでありながら隙がなく、それでいて目に留まらぬ速さで次の攻

撃をしかけてくる王の行動が予測出来ない。王に刃向かうつもりは毛頭ないが、このままではデイルムッドをただの異物として排除してしまうだろう。せめて。

デイルムッドは痺れる腕を気力で操る、左手の槍の柄を長く持ち、思い切り大地を蹴った。黒い王の間合いに自ら飛び込んでいく、王の右手は使えない、必然的に彼の右側は空いている。それを大剣の大きな動きで補助しているのだ、その初動の一瞬の隙にかける。

右肩目掛けデイルムッドが左の槍を一直線に突いていく、王の左が動いた、剣を回転させ槍の穂先を打ち返してきた。だがその刹那、振り上げた左肩から背が開く、そこに右手の槍で切りかかる。がちゃん、と激しい鉄がぶつかる音がして、王の闇色の鎧、左肩に大きな傷がついた。びき、と微かだが輝が入る。柳眉をき、と吊り上げた彼は、間合いに入ったデイルムッドを振り戻した大剣で真横に一閃、薙ぎ払った。

「……………っー！」

しゅ、と空気が切れる振動があつて、デイルムッドの両手の甲が切れた。皮膚が破れ、真っ赤な鮮血が風に乗って飛び散っていく。薄闇の中でもそれは鮮やかな赤で、ようやく漆黒の王、ギルガメシユも満足したのか薄く笑った。

デイルムッドの両手から、からん、と槍が零れ落ちる。血が散った石畳の床に二本、転がった。

「……………だが、我の衣に…傷を負わせるとは…」
よくできた虫だ。

ずず、とギルガメシユが歩み寄れば足元から黒い霧が湧き、辺りの闇を濃くしていく。ひきずる腕が鳴る。ぶん、と大剣が振り上げられた。

「虫なら…虫らしく…地に、這えっ！」

ぞく、とデイルムッドの背筋が瞬時に凍りついた、追い詰められた自分に逃げ場はない。退く間も与えられなかった、振りかぶった剣の切っ先は躊躇なくデイルムッドに向かつてくる。

「……………っー！」

う、ぶつ。

息が止まった、激痛が全身を駆け抜ける、心臓がぎゅうつと収縮した。

デイルムッドの網膜が真っ赤に燃え上がる。

ギルガメシユの剣がデイルムッドの右肩を貫いたのだ、それはそのまま勢いあまり、背後に倒れ床に突き刺さった。王の吐いた言葉の通り、右肩を貫かれ地面に縫いとめられて、虫の標本である。どん、と背中から落ち、口から血の塊を吐く。デイルムッドの純白の鎧がみるみる血で赤く染められていった。

一気に血が下がり、意識が遠くなる。

だがしかし、とデイルムッドは霞む視界でギルガメシユの姿を追った。ぼんやり

映る彼の右腕――

同じように、あの王も右腕を失ったのだ、おそらく友のため。

胸が張り裂ける痛みは、右肩のそれとも変わりない。

耐えてみせる、とデイルムッドは奥歯を噛み締めた。

彼が右腕を犠牲としたならば、同じく自分も耐えてみせる。ぐぐ、と溢れ出そうになる言葉や名前や、感情を飲み込んで、デイルムッドはギルガメシユを見上げた。

ぎくつと、すばらしくよい手ごたえがあった。

人の肉を切る、骨を断つ、刃に振動して掌に伝わるこの感触。決して嫌いではない、むしろ血を見ればじわじわと体内の水が沸騰する。自らの冷え切った体温が、流れる冷たい血が、いい具合に温度を上昇させていく。

「このむしけら」

低く呟く、自らの足元に転がる白い体は、全身を激痛で痙攣させ床をのた打ち回っている。だが右肩を剣で縫いとめられ、まるで死に掛けの蝶のように、ばたばたと手足が動くだけだ。

う、あ、ああ！

と薄い唇から悲鳴に近い息が漏れるものの、白い男は決して言葉を紡がない。それがギルガメシの興味を惹いた。

痛みでのけぞる白い体、握り締めた拳、反って痙攣する足の甲、震える喉。

そして白い鎧を濡らしていく赤い体液――

なんて卑猥だろうか、死ぬ間際の人間の絶頂は。

とくに足下で暴れている肢体は、激痛を耐えているのか、貫かれた快感で悶えているのか区別がつかないほど、留めなく欲情を溢れさせている。黙って真上から白い体を見下ろす、はっ、はっ、と荒い息をつき、霞む視線でギルガメシを追ってきた。

「……………」

垂れ目がちの淡い琥珀色の瞳、それを縁取る黒く長い睫毛、痛みのために浮かんだ涙状のもの。ころ、と睫毛に乗ったそれが、右目の下の妖しい黒子を揺らした。ずく、と冷えた体がますます沸騰する、腰に欲が溜まるのがわかる。

犯したい。

そう感じた、ギルガメシの思考が白い体にも伝わったのか、びくん、と岸に

ファイジカ・ワリオーサ



あがった魚のように、転がった体が跳ねた。戦士の体でいながら細い腰が震えている、痛みなのかそれとも、これから身の上で起ころう悦楽を予感しているのか。この細い腰を砕けるまで犯したい。この白い眷属の体を開いて暴いていけば、この世界にも変化が訪れる、そんな気がしたのだ。

この薄い闇、宵の闇、光射さない世界にも――

* * *

体温は低い。

流れる血が冷たい。

砂漠の砂に深く深く、自らの体が沈む。

広い砂の海に、一人。

歩き続けているが、行く先がわからない、もともと行く宛はあったと思うのに、それもすでに深い帳に閉ざされて思い出せない。がしや、と漆黒の鎧が不気味な音をたてる、一歩一歩足を踏みしめて歩く。

『何か、あつたはずなのだ』

歩くその先に、求めているものが。

『我の欲するものが』

だが、それが一体、何であったのか。

なぜか思い出せない。

とてもとても、大切なものであった。なにものにも代えがたい、我の唯一無二のもの。

ふと気がつけば自らの右腕が壊れていた、使い物にならない。ぶらぶらと肩から下がっているだけの飾り物。痛みもあるがどうでもいい。おそらくこの世界の

禁忌を犯したか。

「頭はほんやりするばかりで、明確な答えらしいものは見つからない。ただだ、砂の上を歩くだけだ。」

「どれほど歩き、どれほどの時が経ったのだろう。」

曖昧模糊として、もうどうでもよくなった時、砂上に摩天楼が現れた。

『……………』

砂漠の丘に突如として切り立つ都市国家、その骸だ。ジグラッドを中心に立ち並ぶ町並みには見覚えがある、自らが造り上げた都市ではなかったか。我はあの国の王ではなかったか。

黒く重い足を摩天楼へと向けていく、ざす、ざす、と足跡を残していく。引きずった右腕の跡も線になって這っていた。廃墟の入り口に立つ、ジグラッドの残骸を見上げれば、真黒な闇のような記憶に光射すのではないか、と思ったが、何も変化は訪れなかった。

「反して酷い虚無がギルガメシュを襲う、出口のない迷路のようだ、進めど進めど、何もない。」

「そう、何もない。」

「心が動くものが何もない。」

「これは世に倦んだということか？持ちすぎで有り余り、選ぶことも面倒でそこにある。実はこの砂、この砂漠、全て物に埋め尽くされているのではないか、この廃墟、この町、実は大勢の人間が歩いているのではないか。そこにあっても居ても興味を惹かず心が動かなければないのと同じだ。」

「取り留めない事を考えて崩れた町の中に足を踏み入れ、そして神を讃えた神殿の頂に亡羊と立っていた。神殿の崩れた女神の彫像が泣いているようにも見える。」

『……………ん？』

「神殿の太い支柱、その上に立って見下ろせば、白い影がふわっと動いたのだ。幻覚か？と呟きながら、神殿の中を歩き回っている人影を見る。しっかりとした足取り、両手には赤と黄色の鮮やかな大槍、白い足元には影があり、ただの幻覚ではないと理解した。」

『……………なにやつだ』

「倦んで盲目に近いギルガメシュの目に映る、ということが驚嘆に値する。しかもそれが生きているとは。ギルガメシュは右の腰に下げた鞘から剣を抜くと、左肩に担いだ。ずしと重いそれが心地いい。剣は人を斬るためにある、刃は鋭いほうがいい。」

「斬るのか？と 心の中の誰かが問う。」

「斬る、と即座に応えた。」

「この世界に存在できる、とはつまり、あの白い男がただの人ではない事を示している。あの男は眷属であり、自らの忌むものだ。」

「斬り捨てる。」

「手応え、というほどのものでもない。確かに王の衣に傷はつけたが、極、小さなものだ。それよりも、黒い足下でのた打ち回る、白い体が目に焼きつく。見えてはいるが、すでに何も映さない、盲目のギルガメシュには、床で暴れる体から白い光が染み出してくるように感じた。」

「右肩に突き刺した剣、貫かれ床に縫いとめられ、溢れ出る赤い血液。激痛であろうに白い鎧の者は、恨みや呪詛や哀願を、一つも口にしない。ギルガメシュに与えられた痛みさえも、享受しよう、とそのように見えた。」

「……………なんの…つもりか」

「きつく閉じられた白い鎧の男の、薄い脛、震えて耐えている。」

「う、ぐっ、」

痛みから上げる悲鳴も堪えて。この男は一体なにを忍んでいるのか。もつと悲鳴や嗚咽や、そして怨嗟の言葉を聴きたくなった。

「…痛いであろう？」

ん？とギルガメシは静かに、だが体内は酷く興奮して、声をかけた。かけ様、右手の甲を踏めば、きれいに白い背が反り返る。

「ん、あー！」

剣の刃が動いて傷口が開き、肉が切れる痛みで男の目が見開かれた。目の端にちよこんと乗っていた光の粒が、耳の方へと流れていく。しつとりと濡れた黄金の瞳の瞳孔が、ギルガメシを捕えて離さない。

物言う瞳だ、と思う。

激しくギルガメシに訴えている、そのくせ目の表情はうつとりと融けるようで、抉って紙めたくなった。

ギルガメシは魚のように跳ねる体の側に、膝をつく。溢れた赤い鮮血も、すでに底をつきかけているのか、白い男の面は青褪めていた。真上から男の顔を覗き込み、まじまじと揺れる長い睫毛の下の瞳を眺め、そして潤んだ瞳ごと、舌を這わせた。

ん、と密やかな息を出す、男の瞳は甘い、舌に残る感触も菓子のような。

「……喰ってしまいたいな」

がさがさとした声で呟けば、白い男の肩がびくり、と震えた。

「…こわいのか？？それとも、悦びなのか？」

いくら問いかけても男は言葉を吐かない、切なげに眉をよせ、薄く唇を開いて誘うだけだ。ふん、とギルガメシは鼻で呟って、男の頬を撫でた。撫でたところで自らが漆黒の鎧をまとったままだと気がつき、これでは直に触れて味わうことが出来ないと思い、瞬時に鎧を脱いでしまう。腰に巻いた布一枚になっ

ファイガ・ワリオーサ



あらためて白い鎧の男の頬に触れた。きつと温かいはずだと考えていたそれは、血がなくなつて冷えている。それでも男にしては柔らかな肌理のこまかな肌感覚が指に伝わって心地いい。久しぶりに触れる生き物、薄い皮膚一枚の下に血が流れている、その感触。

だが縫いとめられた男の濡れた目は、脱いだ鎧の下から露わになった、ギルガメシの右腕に注がれていた。男の視線を追いかけて気がつき、自身で垂れ下がった無様なものを見下ろした。

使い物にならない右腕は、肩からくりと骨がずり落ち、指先はすでに黒い。肌が変色し強張つてそこに赤い血管が透けて見える、まるで刺青の如くなっているが、時々脈打っているのがわかった。

「……………」

いつの間にもこのように、侵食されたものか。少し首を傾げて考えてもみたが、思い出したところで、つまるまい。右腕は何かの代償だが、得たものが側になんことを考えると、騙されたか己がしくじつたのだ。

それよりも今は目の前の白い体をいたぶることだ。向き直つて生きている左手で、男の首から肩にかけて触れた時。しゅ、と蒸発するように男の白い革の鎧が消え、触れた部分が破けた。ギルガメシは自身の左手の掌に視線を移し、呟く。

「……………相殺したのか」

侵食されたギルガメシが直に触れたことで、男の神聖な力で出来た鎧が壊れたらしい。なるほど、と感心したのは、自身がそこまで穢れている、ということだ。と同時に、この男が今のギルガメシとは正反対の存在である事がわかる。

「口をきかないのはそのためか」

かすかに男の目が揺れる。

言葉を交わす、ということは文字通り交わる、その世界と調へを同じにする、ということ。足下に悶える健全な白い虫は、侵食されるのを防ぐため、口をきかない、という訳だ。

「ならば犯してやろう、噛み千切って犯して手足をもいでその白い体を喰い散らかしてやる。その先に何が起こるか眺めてやろうではないか」

地の底から涌いたギルガメシユの声に、白い者の端麗な面が、ものごとが複雑に絡み合ったような表情になった。今にも泣きそうな、すぐにでも怒り出しそうな、噛み締めている唇が震えて言葉を紡ぎ出す、それを飲み込んでいる。

先ほどから何を支えに激痛や侮辱を、持ちこたえているのか、ギルガメシユには理解できないが。

だが血に這う虫は蟲惑的だった、痛みでのたうつ腹、腰、開いた太股から足。ギルガメシユは左手で、指を這わせ、白い鎧の上から抉るように撫でていく。首から鎖骨、半端に破けて消えていく鎧の下から、肌が露わになっていき、その手触りを確かめる。ぐい、と心臓を掴むように左胸に触れる、びくり、と今までにない反応を示して白い者の体が跳ねた。

「あつ」

と、息を吐いて白い顎が上がる、まるで噛みつけと言わんばかりに喉が反って伸び上がった。破れた首から胸、そこに触れられるだけで感じるらしい。自ら動けば剣に刺しぬかれた肩の傷が痛むだろうに。くつ、とギルガメシユは腹の底で笑った。痛みより快感が先に立つとは、なんとも淫猥な体だろう。

白い者に望まれるまま、ギルガメシユは反って鮮やかな弧を描く喉に、がぶり、と噛み付いた。

「あつ、 ああつ！」

くぐもった男の声は顔に似て鼻にかかり、とろりと甘い。皮膚に歯を立て、つぶ、と柔らかく破っていけば、男の血の味が舌に乗る。鉄錆びた味は生きた

オド、生命力を感じさせて、陶然となった。噛み付いたまま肌に舌を這わせれば、吸いつく薄い皮で気持ちがいい。舌で皮膚に穴を開けるように舐め、齧りつき、血の味を堪能すると、ギルガメシユの下の体は、動くことを許されず、しかし耐え切れずに震えている。

「あ、あ、あ……」

やめて、とも言えず、痛みでばたばたと足が暴れ、動く左手でギルガメシユの背を叩く。だが軽い羽虫の羽ばたきのように、おかまいなしにギルガメシユは首から鎖骨へ、噛み痕をつけていった。骨をしゃぶるように舌先を這わせれば、白い男の膝から力が抜けて、ゆっくりと開いていく。

「痛いかな？可哀相になあ」

哀れな生き物ほど可愛らしく可憐である。

ふと、破れた革の鎧の下から覗く左胸の尖り、乳頭はつん、と上を向いて硬くなっていた。それが痛みに震えている。左肩から流れた血で汚れる胸、尖った乳首に舌先で触った。

「ん、んっ」

じたじた足が悶える、逃げることが出来ず、首を乱暴に振れば、白い者の波打ったブルネットが乱れた。頬に髪がかかった横顔、流れる蜜色の視線がギルガメシユを追ってくる。痛みで霞んで潤んだ流し目は、もっと、とねだるようにも見えた。

前歯で噛んで挟むと、舌の腹でねぶる、硬くなったそれが敏感に感じていることがわかる。はあ、と肩で息をして、白い男は懸命に耐えている、だがそれを裏切るように、男の腹が痙攣してのたうっていた。舌の上で乳首を転がす、強く吸って開放する、目の前で濡れて光った白い者の乳頭はすっかり色づいて今にも咲きそうになって極まっている。

ん、ん、と可愛い鳴き声を上げた、白い男の右手がいつの間にか抵抗をやめ

て、ギルガメシュにすがりつくように左手が回されていた。きりつ、と爪が立っている。がりがりと爪を立てている、その痛みのほうが失った右腕の痛みより勝っている気がして鬱陶しい。

穏やかに触れることがもう出来ない、ばりばりと鎧を千切って捨てる、その度にびくびくと痙攣した白い体は、ギルガメシュの中の衝動を深くするだけだ。びりり、と下腹部から太股にかけて引き千切る、そこに覗く均整の取れた腹、縦に長い女神が持つような臍、筋肉質だが弾力のある太股。目を引いたのはすでに純白の鎧の男の生殖器が緩く立ち上がっていたことだ。

酷い激痛のはずだが、それよりもギルガメシュに触れられた愛撫のほうが、感覚として勝っていたのだろうか。ギルガメシュの視線に感づいたのか、白い体がくねる。足を閉じて、もじもじと甲が震え、青褪めた美しい顔は羞恥で背けられた。持ち上がった、つんとした鼻、顎の稜線が媚を売っているようだ。

「……痛みより、快楽、か？それとも我に触れられるのが、それほど良いか？」

「……っ」
面をそむけたまま、瞳だけで睨んでくる、その視線がすでに男から与えられる深い快楽を知っている。その証拠に、とギルガメシュが閉じてしまった足を片手で開き、右膝裏を持ち上げてみれば。

「んっ」
足の間、奥に秘めた淡いの穴は、待ちわびて薄く色づき、ゆるやかに開いている。戦っている孔は湿っていて、ギルガメシュに貫かれているのを待っているようにしか見えなかった。

「……唾えるのを、よろこぶ孔か」
久しぶりに見た、感じた、人の血肉にギルガメシュのものが猛っている。誘われるままに、濡れた孔の入り口にぐいつ、と押し付けられ、待っているくせに

反射的に白い男がたじろいだ。

ふ、あ、と息を飲み込んで、腰を引こうとするが、剣が刺さった肩は動かせない、ギルガメシュは遠慮なく孔の中に無理矢理押し入って、秘部をめりめりと開いていく。

「うっ……あつ、あ」
伸び上がる純白の鎧の体、可哀相なほど見開かれた琥珀の目、上と下と、同時に襲う痛みには引き裂かれそうに違いない。ぶんぶん、と首を振る様子も力なく、見開かれた琥珀の瞳から涙が飛び散っていく。その姿が美しく、腰に力がこもった。

奥へ奥へと割り開いて挿入していけば、ぎゅ、と締め付ける淫蕩な体、髪はざわざわと蠢き、太股が痙攣して震える。

「ん、んっ」
ギルガメシュが入って動けば、当然肩の傷も動く、痛いと呼びだしたいくせに、頑なに、一層、何かを堪えている、目の前の体。中は、驚くほど熱い。ギルガメシュの体はどうに冷え切って体温がない、もう触れることはないと感じただけに、反則的な熱さに、もう硬く屹立したものは溶け出しそう。じゅく、と先から溢れ出ている。

「んんっ！」
それに感じたのか、白い肉体がさらに締め付ける、二人の間でぶる、と紅色の生殖器が揺れた。じくじくと染み出す組み敷いた男の体内の粘液が、ギルガメシュのものを熱く包み込む。生殖器の芯まで入り込むようでもたまらない。

大人しくしている事も出来ず、中を擦るように律動すると、ああ、と一層高い悲鳴を上げて、白い男の足が広がって膝が持ち上がる。ギルガメシュのものが男の性感帯に触ったのがわかる、あ、あ、あ、と吐息を上げて、綺麗な男の顔が、悦楽に蕩けていくのが見えた。



痛みよりギルガメシユの性器に震える体、求めて応え、下腹を戦かせて挿入されたものを悦ばす。

「淫売婦め」

この体はとくに憶えて、知っているのだ。

そして同じように、ギルガメシユの体もこの肉体を知っている。心は頑なに純であるくせに、相反して享乐的な体。だからきつと、犯そうと考えたのだと思ふ、感じて興奮し今もさんざん孔の奥を突いてえぐり、悦に浸っている。片手で腰を掴み、がくがくと揺さぶって相手の肉を擦って喰らう。締め付け、緩んでギルガメシユのものを愛撫する壁に恍惚とした。

白い鎧の男は、喘ぐことしか許されず、荒く息を落としていく。溢れる血のせいで、すでに気は遠くなっていると見えるのに。

それでもいつかな、言葉を発しない。歯み締めた唇から漏れ出る何かを、いつの間にかギルガメシユは期待していた。泣いて喚いて、名前を呼べばいい。

「なんと、こわい者め」

まるで白い鎧の男の体内に子宮があるかのように、ぐしゅつとぬめる壁の中、熱く猛った己の凶器の先から迸るものをばら撒いた。熱い水を腸内に撒かれ、白い者から悲鳴があがる。

「くっ、うっ、あ、あっ」

耐えて耐えて、それでも我慢できずに出してしまった、快樂の掠れた声は、それだけで異様に甘ったるい。ギルガメシユは乱暴に、孔から己のものを引き抜けば、たら、と先端から白い体液が零れ、伝って白い腹に落ちた。

緩く開いた尻の奥の孔、入り口は紅色に腫れ、そこから体液が漏れ出している。じ、とそれを見やり、ギルガメシユは呟いた。

「……貴様を犯して、わかったことが一つある。お前は、私の求めている無二のものではない、ということだ」

淫らで、見る者を狂わせるほどの体を見下ろして。

「私は求め、彷徨っている、そのものは唯一無二、私の片割れで半身だ。貴様のように淫猥な生き物ではない」

青褪めた頬が、歪む。

ギルガメシユは容赦なく、肩に突き刺した剣を抜いた。

「うっ、あっあっ……っ！」

血塗れた剣の刃、それを追うごとく真っ赤な鮮血が弧を描き、噴き出て散っていく。更なる痛みで、白い鎧の男が激しく痙攣し、背中がのたうつ。反りあがったかと思うと、大きく見開いた目は虚空を睨み、そして気を遠くしたのか、ばた、と動きを止めた。

なんと無慈悲なのだろう、王よ。

ディルムッドは遠くなる意識と、赤く染まっていく視界の中で、心が引き千切れそうな感情に襲われていた。王の言葉のままだと、わかっている。ディルムッドでは彼の無二の友の、身代わりにもならない。わかっていたからこそ、口に出して言われ、つきつけられてしまうと、刺された右肩の痛みさえ霞んでしまふ。

そんなこと、わかっている。

喚いて叫んで、暴れてしまいたい。

デイルムッドはギルガメシユのサーヴァントである。召還に初めて応じ、得ることの叶った主だ。主に忠義を尽くす、それを叶えるために召還に応じたが、生前の主と違い、ギルガメシユは不遜で傲慢で奔放だった。忠義を重んじるデイルムッドをあざ笑って一蹴し、しかしそれを越えて彼の存在は大きく、人を惹き付ける力があつた。

いつの間にかデイルムッドは、元英霊であり、遙か古代の王であつたという彼に跪くことを、喜びだと感じるようになった。彼のサーヴァントとなり、これ以上の僥倖はないと。主が再び聖杯を望むのであれば、死を賭して挑むのだと誓つた。

デイルムッドにとって、主に仕えた以上、あますことなく全てが主のものだ。主が足を開けと言えば足を開き、気配を消して消えている、と言われればずっと霊体化し、延々と何時間でも側に傳っていた。

『ん、く、ッ』

口を大きくあけ喉の奥まで開いて、主の猛つたものをいただく、主の体の全てから出る体液は魔力が含まれ、それがデイルムッドの存在出来る力の源でもある。舌を巻きつけて回転させ、先から滲み出たものを吸い取り、デイルムッドは恍惚とした。舌先からじわじわと魔力が血管を通して、全身に行き渡っていく。

もつと欲しい、喉の奥を締め、裏を舐めながら、頭を上下させてデイルムッドは主の性器を愛撫した。右手で硬いものを握り締め、先の張り出した部分に添って舐めまわせば、更に強度が増して熱くなっていくのがわかる。主の精と魔力を貰えるのだと思うと、その悦びでデイルムッドの腰は痛ほど張りつめ、膝立ちの内腿が震えた。

ファイジカ・ワリオーサ



『そんなにうまいか?』

冷淡な物言いにも聞こえるが、デイルムッドにはわかる、主の声も極まってきたのだ。感じているとわかると、デイルムッドの体は打ち震えた。デイルムッドは主の問いに小さく応え、口に含んだまま、顎まで唾液を垂らしたみつもまない顔で、視線だけ主の面を追った。

『くッ』

と主が笑う、それが響いてまた刺激がある、デイルムッドは耐え切れずに性の性器に舌を巻き、じゅく、と先までしゃぶって先端を抉ろうとする。そのとき、ぐい、と遠慮のない力で主がデイルムッドの前髪を掴んだ。

『あッ』

口を開いたまま、引き抜かれる。目の前で主のものが弾けたのが見えた。ぱし、と音がしてデイルムッドの顔に精液がかかった。咄嗟に目を閉じたが、額から、唼、睫毛にまでついて。口からはだら、と主から溢れた精と自分の唾液が零れている。ああ、勿体無い、と思ひ、デイルムッドは丁寧に口の周りを舐め、指で顔についた精液をふき取ると口に運ぶ。

『貪欲だな、貴様は』

もつと欲しいのだろう、と主が言う。勿論だ、これだけでは全然足りない。本来であれば回路を繋いで貰うものだ、それを直接飲んでるので効率が悪い。わかつていながら主はデイルムッドと回路を繋げなかった、元来、主は魔術師ではない、仕方がないとわかっている。それは不安定な関係でもあつた、デイルムッドは魔力の供給のために常に主の側にいなければならず、行動範囲は限られている。その上、主がデイルムッドを置いて出て行けば、それでお終い。他から魔力を奪うことも出来るだろうが、デイルムッドはすでに主の魔力の味を覚えてしまっている。

離れられない。

ベッドに後ろ向きに転がされる、無意識のうちに待っている、デイルムツドの尻がもち上がった。主が容易にデイルムツドの革の鎧を破いて壊していく、背後から腰に手が周り、ぐい、とさらに天を向くような姿勢になった。

『これが英霊とは笑わせる、まさに犬だな、性奴だ』

何をどうあざ晒わられてもデイルムツドにはどうでもよかった、これが主との唯一と言っている繋がりなのだ。両手で尻をつかまれ開かれた、痙攣していた後ろの孔がひくついて、目前に晒されている。

『くっ、うっ…』

主のものを啜えてしゃぶっただけで、己の性器も驚くほど硬くなって屹立しているのが恥ずかしいほどだ。羞恥で身悶えているその孔の入り口に、主の湿ったものがあてがわれた。

『思う存分味わうといい』

萎えていたはずのものはすでに力があつて、背後から挿入されて、デイルムツドの背中がしなる。ずく、ずく、と奥に入る度に、性感が増していく。我慢できなくなつて、デイルムツドは背後から犯されたまま、自分の痛いほど屹立した性器に手を伸ばした。すでにシートに擦られて先端からは滲み出すものがあり、辺りを汚している。

主の怒張したものがデイルムツドの腸壁を撫でながら入ってきた、そこからもすでに魔力を感じて、デイルムツドの顎があがる。開いた口からは喘ぎ声しか出ない。粘膜を直接犯され、擦られて前後に律動されて、気持ちよくないはずはない、その上、悪戯に中のしこりを先端でぐりぐりと蹴られれば、デイルムツドの喉から悲鳴があがった。それだけで、手の平にある自身のものが、どくつと大きく脈打つ。

与えられる快樂の大ききで、更にデイルムツドの内側が蕩けていった。早く主の熱い体液が欲しい、魔力が混じった、どろどろのそれを中に思う存分撒いてほ

しい。それに呼応するように主の手がきつくデイルムツドの尻を揉みたく、中に入ったものに強く擦りつけられて、デイルムツドの瞳から涙が零れた。先ほどつけられた精液が睫毛についている、それと混じって落ちていく。

『だ、め、です、あ、るじ、もう…っ』

デイルムツドの背中、腰、尻がくねる、主の性器を呑むように。袋が逆らつて硬い肉の塊をこねくりまわし、体液が溢れた。主が腰を律動する度に、ますます溢れ出て止められない。ぐしゅ、と音を立てて孔から漏れでて腿に伝っていくのがわかる。

にやり、と主が薄く笑んでいるのが、背中越しに見えた、その表情をずっと覚えていたい。あんな顔をさせられるのかと思うと。

デイルムツドもわかっている、今世の主は、自分が惹き止めておけるほど生易しい存在でない。あまつべなく、世に君臨する存在なのだ。デイルムツド一人が独占できるものではない。

だからかもしれない、離れがたくなつてしまった。これが自分ひとりのものになれば、もつと心は楽だつたらうし、ここまで主に執着はしなかった。

主の手が力強く腰を掴む、ずくん、と最奥まで突かれ、衝撃でデイルムツドの体が動いた、あ、と高い嬌声が出る。自分の手の中にあつたものも、シートに強く擦られ、ずず、と皺をつくつて。びゅく、と白い粘った精液を放った。同時に、デイルムツドの体内にも待ちかねていた高い温度の飛沫があつて、はまつていた肉の棒と自分の体が溶けていく気がした。

あああ、と感極まつたため息をつく。

この瞬間はデイルムツドのものだ。

ある日、大人しく屋敷で待っていると、主が上機嫌で帰ってきた。

『珍しいものを手に入れた、我が探していたものだ』

そういつて主、ギルガメシュにしては慎重な手つきで、粗雑な古い新聞に包まれたものをダイニングのテーブルに置いた。中のものを労わるように広げていく、その過程で、ディルムッドには強い違和感があった。この感覚、包みの中に納まったものから次々溢れ出てくる、尋常ならざる気配。

『主、これは一体？』

神妙に聞き返す、主はゆったりと笑って満足げに忘れた。それも珍しいことだ、彼がいかにこれを欲しかったのか知れよう。

『知りたいか？…これは、ウルクの遺跡から出土した、冥界問答だ』

『冥界、問答…？』

不味い、とディルムッドの勤が告げている。これは生身の人に触れてはならぬもの、溢れ出て来る気がすでに穢れている。

『主、それに直接触れては！』

ディルムッドが手を出したが、ギルガメシュはそれをばし、と叩いて跳ね除けた。

『いらぬ世話だ、雑種如きが』

しかし、と言葉を繋ぐ間もなかった、包みの中にあつた小さな、日干し粘土の欠片、判読できない幾何学模様が並ぶ、それが一瞬にして弾けたように見えた。弾けて黒い粒子となって、たちまち大きく球状に膨らみ、ギルガメシュの体を覆った。

このままではギルガメシュの魂を持って行かれる！

咄嗟にディルムッドは、黒い塊の内側に右手を突っ込んだ、主に触れるはずなのに、なぜか空を掴んで。目を見開く、もう向こうの世界に取り込まれてしまったのか、と愕然とした。

この粘土板は一体なんだ？

そしてディルムッドが叫んだのは自身の父親の名前だった。

ファイカ・ワリオーサ



『我が父、墓王ダウンよ！宵闇の世界、大地の底、冥界に我を連れたまえ！』禁忌であり、人が口にしてはならぬ名を呼ばれば、黒い粒子の塊の中から、大きな黒い腕が生えた。それは手を開くと、がばり、と喰らい付く如くディルムッドの体を掴んだ。ディルムッドは身構える暇もなく、父の腕に乱暴につかまれたまま。

すーと重力に引かれ、引かれて、光の射さぬ穴を落ちていく。

そして、ディルムッドは枯れた砂漠の地に降り立ったのだ、墓王の子として本来の姿でもって。全身白い装束に変わったのは、冥界の穢れた気から、清廉なものを身にまとい魂を守るためだ。この大地に降り立ってディルムッドは理解した、ここは確かに冥界ではあるが、ギルガメシュが過去に見た光景、いわば心象風景。粘土板に込められた念が強かった事、更にギルガメシュが強く求めていたことで共鳴し、現世の彼が取り込まれてしまったのだ。冥界であるがギルガメシュの心の中であり、おそらく墓王ダウンも手出しは出来まい。

一刻も早く、ギルガメシュをここから連れ出さないと、この世界の住人、死者となってしまう。執着が強い者ほど鎖の如くここに繋がれ、輪廻もままならない。早く主を見つけ出し、元の世界に戻ろう、心を決めて歩き出したディルムッドの前に現れたのが、黒く変わった主の姿。冥界問答の中で彼は掟を破つたのだ、この世界のものを食べ、あまつさえ死者と言葉を交わしてしまった。自分の右腕を代償として冥界の扉を開き、無二の友と出会い、心を抑えきれず掟を破つて穢れたのか……。

心が刻まれるように痛いのはなぜだろう。刺された右肩よりずっと痛い。

こんな気持ちになるのはおかしい。ギルガメシュは主であつてそれ以外のものではないはずだ。それでも、こんなにも離れたいと感じているのが己一人で、彼にはディルムッドの記憶が一つも残っていないのかと思うと。一人で必死になって、

命をかけてここに存在しているのに、空回りを繰り返す歯車のように。ギルガメシの何も動かすことが出来ない。

恨み言の一つでも言つてやりたい。

遠のく意識で、真上から犯しているギルガメシを潤む目で睨んだ。

* * *

この白装束の男は何か知っている、自分の忘れた何かを覚えている、全て吐かせてやるのか、と思つたが、それ以上に恐ろしいほど欲情しているのだ、己の体が。一度犯した後、氣をやった男を前に、肩を刺した剣を引き抜き。血塗れた大地に転がった体、破れた白い鎧、そこからはみ出た血の氣のない肉、開いた足の間は手酷く犯したせいで濡れそぼっている。痙攣した緩く開いた穴が見え、濃い桜色に充血したそこがまた、ギルガメシの腰を激しく疼かせた。

意識を喪失した哀れな体、おかまいなしに横向きに体位を変えて、左手で膝裏を持ち上げて股を開かせる。こういう時、片腕というのも存外不便だと思ふ。再び猛りはじめ、硬くなった自らのものを、すでに体液で一杯になつた孔の入り口にあてがった。ぐい、と挿入すれば、じゅぶ、と押し出されて己が放つた種と、白い男の愛液が混じって溢れてくる。なんと淫らな体だろう、何度犯しても底がなく、蕩ける沼のようだ。

ふ、と行為に夢中になつていた時、白い鎧の男の脛が持ち上がり、長い睫毛の下、薄闇でも輝く金色の瞳が浮かんだ。その目を見ながら、ぐい、と腰を進めて体内に侵入していく。入った、とわかつた途端、その黄金の瞳が大きく揺らめいた、金の炎のように。

あ、と小さく小さく吐息をついただけ。

だが、犯されるのを待ち受けていたような羞恥と、その気持ちよさと、何か

が届かない、そんな切なさが混在した複雑な瞳の色で。拗ねた口元が印象深く、たまらなく。きっとギルガメシはこの男を知っている。

中に入った怒張したものは、きつく緩く締められ、やわやわと溶けていく。すると、白装束の男の、左腕が伸びた。

「ん？」

ギルガメシが応える、それも大事そうに、下から顔を包み、頬を撫でる。首から背に回されて、そのまま引き寄せられた。ギルガメシの間近に拗ねて泣きそうな、苦しげな表情の面がある。寄せられるままに、薄く開いた唇に自分のそれを重ねあわせた。

上と下が繋がって、呼吸がギルガメシに入ってくる、ああ、この体はやはり覚えがある。無上の肉体、蜜で出来た底なし沼。

「……デイルムッド、か？」

脳裏に閃いた不思議な響きの名前を、自然と口に出していた。

その音色がこの世界に零れ落ちた途端、かちん、と歯車のあつた音がした。名前を呼ばれた白い鎧の男、デイルムッドの表情が変わる。ふわっと、目尻が下がって、甘い顔がより一層幼く見えて微笑んだ。呼んでくれた、とデイルムッドの唇が動いているのがわかる。優美にデイルムッドの指がギルガメシの唇をなぞり、軽く押し当ててくる。そんな純な仕草と裏腹に、デイルムッドの足はギルガメシの腰に巻きついて、自分から腰を上げてきた。うねる熱い壁に飲み込まれ、じゅくじゅくと吸い取られ、更に奥まで突いてやれば、快楽に落ちていく綺麗な悲鳴が宵闇の、崩壊した神殿に木霊した。

ギルガメシが目覚めた時、自分の体は屋敷の、寢室のベッドの中にあつた。

真つ先に目がいったのは右腕だ、壊れて動かなかつた片腕。だが、そこにあつた

のは白いシャツに包まれた、いつものそれ。疑心暗鬼になりながら腕と指を動かしても滞りなく神経は行き届いている。

そして。左側に目を移せば、ディルムッドがしっかりとギルガメシユの左腕を抱きしめて横向きに眠っていた。横顔には陰が宿り、いささか疲れている。

「……………」

ディルムッドの姿を見て、何が起ったのか、思い出した。ギルガメシユは常から探していた、古い記録、自らの『冥界問答』をようやく見つけたのだ。なぜ長い間この粘土板を探していたか、それはギルガメシユ自身、ほとんど記憶が残っていないからだ。ギルガメシユは死んだ無二の友を冥界から連れ戻そうと、自分の右腕を代償にして冥界の扉を開いた。冥界に訪れる際の掟として、物を食わない、言葉を交わさない、と聞かされていたのだが。友の姿を見つけた時、無意識に名を呼んでしまった、同時にエルキドゥもそれに応えてしまう。互いに、うっかりした、と顔を見合わせても遅い。友は更に冥界の奥深い場所へと消え、自分の体は元の世界へ戻れず、穢れた体で彷徨うことになった。

だが――

ディルムッドが左側で身じろぎした。左腕を抱いたまま、ギルガメシユの二の腕に額をつけるようにして丸まって眠っている。冥界で見た白装束ではなく、買い与えてやった白いシャツに黒のパンツ、なぜか裸足だ。ばちばち、と瞬きして、今の状況を確認すると、ようやく面を上げてギルガメシユの顔を見た。

安堵の後、ちょっと、むっとした表情で。

「痛かった、すごく」

と言う。おそらく右肩を刺した事だろうが、性分として謝ることも感謝もできない。ギルガメシユが憔悴とした様子であれば、ディルムッドが静かに言った。

「……………おれのものだ」

左腕を抱いて言う。

ファイジカ・ワリオーサ



ああ、そんなこと気にしてたのか。比べることもない、同じものでなく、だからそれでいいのだが。

むすつとむくれた顔のディルムッドの頬をつねる。ディルムッドは思い詰めたように眉をよせ、すると両腕を伸ばしギルガメシユの首に巻きつけてきた。耳元に薄い口がある。

「主…………おれは小さな欠片でいいんです、あの砂漠の中の、小さな欠片の一つでいい。あなたの心の中の、片隅に置いて欲しいんです」

ふつ、となぜか笑ってしまった。

随分健気なことを言う、と思う、この魅了する肉体でギルガメシユの記憶を取り戻させたくせに。砂漠の欠片なんて殊勝すぎる。

「砂漠の欠片とは笑わせる、さしずめ貴様は砂漠に咲く白い毒花だな、仇花だ」

毒花だと返されて、また拗ねる。その背中に腕を回して抱き寄せながら考えた。

ギルガメシユは、生前、どうやって冥界から戻ったのだろう。失敗して彷徨い、穢れた末にどうやって帰ってきたのか。その記憶が曖昧で、粘土板を探していたのだが。ちら、と腕の中の泣きそうな顔で怒っている下僕を見た。

「貴様…………ひよつとして…………？」

自分は生前も、冥界の砂漠にいた白い生き物に助けられたのではないかとふと思ってしまった。冥界の神の眷属の、白い生き物の気紛れで。それとも冥界の時間軸に境界がないのだろうか、どこかで過去と未来が繋がっている。だとすれば、生前のギルガメシユを取り戻したのも、これか。

ディルムッドの耳を軟く噛み、体から漂う蜂蜜の白いを吸い込んで、この興味深い体にすっかり馴染んでしまった自分に苦笑いしたのだった。

フィジカ ワリオーサ —興味深い体

おいさん、そこなしさんと素敵な金白槍本を作ることができて、キリエヤは幸せでした。お二方の白槍ちゃんのお尻を拝見できると思うだけで、出来上がりを楽しみます。作中に出てきた黒我様のモーションは、まんまダークソウルのアルトリウスです。興味のある方はぜひ！また、素晴らしい槍受け企画が始まることを期待して！

キリエヤ

け あ の 座

今回は『ギルガメッシュ×白槍』というコンセプトの合同誌だったのでまず何を描くかに大変悩みました…。結局性の乱れた若者達みたいになってしまっただけです…カリスマ性A+とは…？原稿の取りまとめなどは僭越ながら自分がやらせて頂いたんですが集まった原稿みて自分の浮きっぷりに愕然としました。な、なんだよお…二人共なんで示し合わせたようにジググラトとか出してるんだよお……せめて古代メソポタミアで馬車セックスにしとけばよかった……。当初は「ひとしきり盛り上がったあと白槍がうっかりアクセル踏み抜いて生垣突入でヴィマーナ(車)大破→ギルさん入院オチ」を予定していたんですが途中で変更しました。これでよかったですと思っています。

酒の席で酔った勢いで「白槍アンソロジーだか合同誌だか出しましょう!!」としつこく絡んだら本当に一枚噛んでくださったのでお二人共懐が広いなぁと頭の下がる思いです。この勢いでもう一回なんかやってみよう！

おい

砂漠の花

この度は白槍ちゃん合同誌をお手にとり下さり有難うございます、そこなしです！表紙でエロだと思っただけで取った方には私のページはさぞ退屈だったろうと思います。どうして白槍ちゃん緊縛エロハアハアとか言っていたのがこんな少女漫画ホモになってしまったのか…。『砂漠の花』は昔の深夜アニメ・WOLF'S RAINの19&20話のエピソードをもとにしています。機会がありましたらこちらも是非！ツメ可愛いよツメ…。

それから、作中での刺青云々はいい加減捏造です。こうだったら萌えるなぁ、という思いつきでああなりました。どうやら透かし彫りや白粉彫りは実在が疑わしいようです。

一度作業中に聴いていたBGMを書いてみたかったので。

作業中BGM 【永遠/May'】
【so deep/SILVERTEAR】
【heaven's not enough/菅野よう子】

最後に。おいさん、キリエヤさん、本当に有難うございました！お誘い頂けて嬉しかったです。足引っ張ってすみませんでした…！！

そこなし





【発行者】

おい(責任者)

<http://anoko.moo.jp/>
【Pixiv ID: 59902】

そこなし(表紙イラスト)
【Pixiv ID: 3786981】

kirieya(唯一メ切守ったで賞)
<http://hanenasi.daa.jp/>
【Pixiv ID: 4016095】

平成25年2月3日初版第1刷発行 印刷：株式会社栄光
(禁・未成年の購入及び購読・無断転載・オークション出品)

この本は成人向けであり、18歳以上であるという購入者の申告により頒布したものです。虚偽の申告により被ったいかなる被害の責務も負いかねます。